九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語動詞現在時形態論（完）

吉町，義雄

https://doi.org/10.15017/2556628

出版情報：文學研究. 26, pp.85-119, 1939-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

日本語動詞現在時形態論（完）

マッオキヌ
吉町義雄譯

第九章　Hoffmann 受身動詞第一群二箇構成

第二活用動詞に就ての歐文法【一一九—二四頁】

第一節　歐文法が Hoffmann 受身動詞第一群二箇構成第二活用動詞への關係【一一九頁】

終に、我々には未だ Hoffmann に於て受身動詞第一群二箇を形成する第二活用動詞を歐文法が如何に視てゐるかを紹介する事が殘つてゐる。是は全關係に於て有益であらう。其等は、一方からは、受身・可能相に就ての問題に於ける如く、見解の同じ雜色を此處で顯すが、他方からは、Hoffmann に類似して、其等は Hoffmann の是等受身動詞を凡て同上普遍動詞 *eru*、得る、能ふ、は複合第二部である複合動詞と見做してゐる事に驚く可き一

致を表明してゐると我々は見るのである。

第二節　Aston【一一九—二〇頁】

何よりも Aston へ轉じて、我々は彼に於ては Hoffmann の是等受身動詞は可能意義を有する自動詞であると云ふ事を發見する。口語文法に於て彼は其等に就て次の様に言つてゐる。「次の例證によつて説明される自動詞は箇々の種類を形成する。其等は普通可能力を有するが、同上動詞を受身形と混和してはならぬ(私案間隔、N. M.)。

kirerru(第二活)、切れる、*kiru*(第一活)、切る、
urerru(第二活)、賣れる、*uru*(第一活)、賣る、
mierru(第二活)、見える、*miru*(第二活)、見る、
kikoerru(第二活)、聞える、*kiku*(第一活)、聞く、
ikerru(第二活)、行ける、*iku*(第一活)、行く。

佛語 se couper(切れる)、se vendre(賣れる)は頗る正確に *kirerru*, *urerru* に對應する。例證 *ikerru* は、是等動詞は自動詞からとも同様、他動詞からも形成され得る事を明示する」。(1) 彼は文語文法に於ても、彼に於ては *ikeru*、行ける、類の動詞は自動詞の此群に含入されないと云ふ差異のみを以て殆ど同上の事を語つてゐる。(2)

第三節　Chamberlain【一二〇頁】

Chamberlain は Hoffmann の是等受身動詞を凡て自動詞と見做してゐる。口語文法に於て彼は書いてゐる。「日本語に於ては、英語には通常受身又は可能の言廻に譯すのがより便利であるが、日本語では元來自動である動詞の廣大な種類が存する……かくて、語尾 *u* を *eru* へ變更して第一活用他動詞から形成された第二活用自動詞の多くが存する(私案間隔、N. M.)。

他動	自動	
kaku,	*kakeru,*	「書く」、
kiru,	*kireru,*	「切る」、
toku,	*tokeru,*	「溶く」、
toru,	*toreru,*	「取る」、
uru,	*ureru,*	「賣る」、
jomu,	*jomeru,*	「讀む」。

eru に終る自動と *areru* 又は *rareru* に終る現在可能との間の差異は、行爲を遂行する物理能力は通常如何なる外部意志にも依存せざるが故に、*eru* に終る形は物理能力——《*may*》よりも寧ろ《*can*》を表現するのに、行爲を遂行する

道德能力は動作者以外に法の許可に依存するが故に、後者は道德能力――《can》よりも寧ろ《may》を表現するのを志すと云ふ事に存する」。(3)

「第二及び第三活用に屬する動詞は *eru* に終る自動詞を形成するを得ないので此爲に *rareru* に終る受身・可能で間に合はせる。併し、變格的に *miru*「視る」、「見る」から形成された *mieru*「見える」を注意せよ。其には *kiku*「聞く」から形成された *kikoeru*「聞える」が似てゐる」。(4)

第四節　Weintz, Rose-Innes, Mac-Govern 及び Sansom【一二〇―一頁】

Weintz は、Chamberlain の樣に、被檢討動詞を自動と見做してゐる。かくて、彼に於ては第二活用自動詞、第一活用動詞から形成される第二活用可能動詞、及び其發生によれば古風受身動詞である第二活用自動詞、例へば、*mieru* が自動詞の同一範疇に陷るのである。(5)

Rose-Innes に於ては凡て是等動詞は、常に自動的である可能相動詞に見える。彼曰く。「多くの動詞(*eru* に終らざる)も亦末尾 *u* を *eru* に變更して形成される他の可能相を有する。此可能相は常に自動的であり、次の通常の場合に於けると同樣、通常自動詞と屢々同等である（私案間隔。N. M.)、

kake·ru「書ける」(自動)又は「書き得る」、

kire·ru「切れる」(〃)又は「切り得る」、

toke·ru「溶ける」(〃)又は「溶け得る」、

tore·ru「取れる」(〃)又は「取り得る」、

ure·ru「賣れる」(〃)又は「賣り得る」、

jome·ru「讀める」(〃)又は「讀み得る」。(6)

「動詞 *mi·ru*「見る」及び *kiku*「聞く」は變格的に 自 動 可 能 動詞、特に、*mie·ru* 及び *kikoe·ru* を形成する」(私案間隔、N. M.)。(7)

同じ觀點を Mac-Govern も墨守してゐるのであつて、彼は書いてゐる。「動詞の所謂 可 能 形は實際屢々 可 能 意義を有する 自 動詞である」(私案間隔、N. M.)。(8)

Sansom は幾分異る觀點を保つてゐる。彼は、例へば、助動詞 *uru* の助力により形成された *kikojuru*、聞ゆる、——*kiku*、聞く、*tokuru*、溶くる、——*toku*、溶く、等の如く、(9) 自 動詞、又は、彼が言ふ樣に、 他 動詞の 自 動 形、そして *eru* 形に於ける同じ *uru* の助力により第一活用動詞から形成される *jomeru* 類に於ける 可 能 動詞とを差別してゐる。(10)

第五節 Lange と Plaut【一二一—二頁】

Lange にあつては Hoffmann 第一の二群の同受身動詞は自動的であるが、第二は可能的なのである。Chamberlain による第二活用自動詞は彼にあつては、例へば、*xirakeru*——*xiraku*, *kudakeru*——*kudaku* 等の如く、Chamberlain による第一活用他動詞に對應する動詞なのである。(11) *tateru*、建てる、*a(x)eru*、遭へる、等の類に於ける Chamberlain 第一活用動詞からのみ形成される可能相動詞は可能的なのである。(12) 動詞 *mieru* を彼は短縮可能形と見做し、動詞 *kikoeru* を變格可能形と見做してゐる。(13) 可能動詞に關聯して彼は注意してゐる。「可能形は、前掲例證から生ずる樣に、自動的である」。(14)

特殊可能相を差別する Plaut は、例へば、*kabu*——*kakeru*, *das'*——*daseru* 等の如く、*eru* を單一（子音）語幹へ添加する Chamberlain 第一活用動詞から形成される可能動詞を此相の動詞と見做してゐる。(15) 動詞 *mieru* 及び *kikoeru* に就て彼は、受身意義の外に、其等は可能意義を有すると語つてゐる。(16)

第六節　Courant と Balet【一二二頁】

Courant 文法は我々に關係する動詞に就て次の樣に書いてゐる。「可能相形成に對して用をする同上動詞 *eru*、能ふ、得る、は他動から出た自動又は再歸動詞又は自動から出た他動詞の得取に對しても亦用をするが、遙に正格的にでなくそして意味の少しか説明し得ない氣儘を以てするのである（私案間隔、N. M.）。

例證、*kaku*、書く、*kakerru*、書ける、
kiru、切る、*kireru*、切れる、
akeru、開ける、*aku*、開く、
xiraku、開く、*xirakeru*、開ける、
(v)oru、折る、*(v)oreru*、折れる、
soro(x)eru、揃へる、*soro(f)u*、揃ふ、
tateru、立てる、*tacu*、立つ、
jaku、燒く、*jakeru*、燒ける、
miru、見る、*mieru*、見える、
kiku、聞く、*kikoeru*、聞える」。(17)

Balet は、*jomeru*、讀める、*mieru*、見える、(18) 及び *ureru*、賣れる、(19) の様な動詞を可能相へ關係させて動詞 *eru*、得る、能ふ、の助力により其等を形成してゐる。

第七節　Smirnov と Pozdneev【一二二—三頁】

Smirnov に於ては我々の考究する動詞は、彼が可能〔v o z m o g a t e l' n y j〕と呼ぶ可能相へ

關係させられた。かくて、例へば、*ikerti*、行ける、*jomerti*、讀める、*kikoerti*、聞える、*uerti*、賣れる、等の様に、かゝる動詞は此相動詞と見える。(20)

D. Pozdneev は此相を中、自動又は可能〔v o z m o ž n y j〕と呼んで其へ同じ動詞を關係させてゐる。(21)

第八節　Hoffmann 受身動詞第一及び第二群を構成する第二活用動詞への歐文法が關係に就て若干の註解【一二三—四頁】

此粗略要覽から、Hoffmann に於ては受身動詞第一及び第二群を構成する第二活用動詞を歐文法が如何に扱ふかが充分明白に解る。是等動詞の第一群へは(一)元來可能相動詞、(二)其現在時終結形が第一活用對應他動詞の同じ時制の終結・限定形と同一なる第二活用自動詞、そして(三)*miju, mijuru*（口語 *mierti*）類の、其際其等の或者を、例へば、《*vore*》、折れ、《*mije*》、煮え、の如き、彼は、成程、括弧に入れて自動詞と呼んでゐる合一母音無き接尾辭 *-j-* の助力により形成された發生によれば古風受身動詞である第二活用自動詞が入ると云ふ事を我々は知るのである。第二群へは合一母音と接尾辭 *-j-* の手段により形成された古風受身動詞が專ら入る。換言すれば、Hoffmann 受身動詞の是等二群は様々の形態構造の動詞から成立するのである。

併し、引用した著者達の殆ど誰もが是等動詞の形態構造に於て何等差別を認めてゐないのである。Aston, Chamberlain, Weintz 及び Mac-Govern は凡て是等動詞を可能意義を有する自動詞と見做してゐる。Rose-Innes は其等を常に自動的である可能相動詞と見做してゐる。Sansom と Lange とに於ては是等動詞の一は自動的であり、他は可能的であり、其際、Lange の註解によれば、可能形は自動的なのである。Plaut は Chamberlain による第一活用動詞からのみ形成される可能相動詞を可能的と見做してゐる。此際 Hoffmann 受身動詞二箇 *mieru* 及び *kikoeru* は彼にあつては一部分受身であり一部分可能なのである。Balet 及び Smirnov に於ては Hoffmann 第一群兩受身動詞は凡て可能相へ關係させられた。Courant によれば其等は自動又は再歸であるが、Pozdneev によれば中、自動又は可能である。此際 Chamberlain, Weintz, Mac-Govern, Rose-Innes, Lange 及び Plaut は動詞 *mieru* 及び *kikoeru* を變格と見做すのである。

從つて、結局、Hoffmann と既名著者達との間の全差異は、Hoffmann 第一受身群二箇動詞は最早受身動詞(除外は其等を受身及び可能と見做す Plaut に於ては動詞 *mieru* 及び *kikoeru* である)とは見做されないと云ふ事に歸する。著者達の或者は可能意義を有する自動詞群へ其等を統一するが、他の者は特殊可能相動詞群へ統一し、第三の者は其等を二群、自動詞及び可能相動詞へ區分し、第四の者は其等は自動詞と見做してゐる。概して、Hoffmann の是等受身動詞は、少しの除外を以て、或は意義によつて、或は相によつて可能的と見做されてゐるのである。

引用された著者達と Hoffmann との間の合致なるものは、彼等に於ては、Hoffmann に於ける樣に、樣々の形態構造の動詞、特に、元來可能相動詞、其現在時終結形が第一活用他動詞の同じ時制終結・限定形と同一なる第二活用自動詞、そして發生によれば自動詞である古風受身動詞が一に混和されたと云ふ事に存する。

彼等と Hoffmann との間の更に合致は、彼等の意見によれば、凡て是等動詞は動詞 *ern*、得る、の助力により形成されると云ふ事に存する。併し、如何なる形態論證をも此觀點の爲に彼等は引用してゐない。言語學と何等の共通をも有せざる彼等の論證は凡て、動詞 *ern*、得る、能ふ、の助力により是等動詞の意義の論理的理解力に歸するのであつて、此際此論理的理解力は是等動詞の對應末尾音聲質を有する動詞「得る」形の音聲符合に專ら基くのである。從つて、此關係に於ては彼等は Hoffmann に類するのであつて、何とならば後者は彼に制定された受身形形成法則は言語の哲學的分析の論理的結果であると見做してゐたからである。換言すれば、方法論的には彼等は Hoffmann 以上には一歩も出なかつたのであつて、何とならば動詞 *ern*、得る、能ふ、が關與する形態論證は被檢討動詞形成に於て彼等にあつては、我々の時代では言語學上全く何物をも論證せず、從つて Hoffmann 時代ではあり得たかも知れない議論にさへもならない Hoffmann 精神の論理的理解力を以て代用されてゐるからである。

形態論證の又は、一般に、如何に由々しからうとも是等動詞形成に於ける動詞 *ern* 關與に對する論據（普通の無根據斷言を由々しい論據とは見做し難いのだ）の缺乏が、第二活用古風受身動詞、第二活用自動詞及び

第二活用元來　可　能　相動詞形態論に就てと同じく、凡て是等動詞　現　在　時語尾形態論に就て上述された凡ては充分有効であると見做す根據を與へるのである。

註

1 W. G. Aston. A Grammar of the Japanese Spoken Language, p. 79. 【以上一一九頁】

2 W. G. Aston. A Grammar of the Japanese Written Language, p. 96—97.

3 B. H. Chamberlain. A Handbook of Colloquial Japanese, p. 206 及 207.

4 Ibid., p. 207. 同人の《A Simplified Grammar of the Japanese Language》p. 77—78【增訂本 p. 88—89】を比較せよ。 【以上一二〇頁】

5 H. J. Weintz. Op. cit., p. 102—103.

6 A. Rose-Innes. Op. cit., p. 31.

7 Ibid., p. 32

8 Op. cit., p. 141.

9 Op. cit., p. 290.

10 Op. cit., p. 162.

11 Prof. Dr. Rudolf Lange. Lehrbuch der Japanischen Umgangssprache, S. 246.【英譯本 p. 222】.

12 Ibid., S. 283.【英譯本 p. 267】 【以上一二一頁】

13 同頁【英譯本同前】。

14 Ibid., S. 285【英譯本關係文句無し】。

15 Hermann Plaut. Japanese Conversation-Grammar, p. 224【獨語原本 S. 220、佛語版 p. 229、露譯本 str. 266】。

16 同頁【獨佛露本同前】。

17 M. Courant. Op. cit., 90.

18 Balet. Op. cit., 126.

19 Balet. Op. cit., 156.

20 D. Smirnov. Op. cit., str. 121—125. 【以上一二二頁】

21 D. Pozdneev. Op. cit., str. 164. E. Spal'vin 教授の見解に就ては、彼の日本口語文法講義の石版が私の自由にならないので、何も語るを得ない。 【以上一二三頁】

結　論【一二五—三一頁】

結論に於て私は、第二活用語尾「得る」説が第三及び第四活用動詞現在時語尾に對する傳統的見解と共に、受身・可能相「在得る」説も亦、日本語動詞構造研究とそして其基本及び形式附屬物との間に存する實際關係制定事に於て演じた消極的役割に關して若干の語を語らない譯に行かない。

形態事實の偏見なき分析は、全活用現在時全形語尾は特別形態質、又は形式附屬物 -ɴ であると云ふ事を明示してゐる。

是と同時に我々は、第二活用動詞語尾「得る」説そして形態質複合物 -uru(口語では -iru)を第三活用

現在時文語限定形語尾と誤認するそして形態質複合物 *-ru* を第四活用動詞の同じ時制終結・限定形語尾と誤認する說が斷言する樣に、一語幹でなく、單一及び派生二語幹を凡て第二、第三及び第四活用動詞が有すると云ふ他の非常に重要な事情の制定に來るのである。

此外に全然明晰に開及び閉の語幹二類型が表される。

其に語尾 *-u* を附加して現在時終結・限定形が形成される第一活用動詞單一語幹は常に閉である(例へば、*arukn*、歩く、〈*aruk+u*, *sasn*、刺す、〈*sas+u*)。

其に語尾 *-u* を附加して現在時終結形が形成される第二活用動詞單一語幹は、壓倒的大多數の場合に於て閉であり(例へば、*agn*、揚ぐ、〈*ag+u*, *tabn*、食ぶ、〈*tab+u*)頗る稀に開である(例へば、*kacin*、飢う〈*kacu+u*, *un*、餓う、〈*u+u*, *un*、植う、〈*u+u*)。(3) 其等に於て動詞語幹(例へば、*fu*、經)に屬する母音音聲質 *u* が現在時終結形語尾として現れる第二活用小數動詞單一語幹も開である。

現在時終結形が其から形成される第三活用動詞單一語幹は常に閉である(例へば、*sugn*、過ぐ、〈*sug+u*)。

第四活用動詞單一語幹は常に開である(例へば、*mirn*、見る、に於ける *mi-*, *nirn*、似る、に於ける *ni-*)。

其に語尾 *-u* を附加して第二及び第三活用動詞現在時限定形そして第四活用動詞現在時終結・限定形が形成される派生語幹は常に閉である。(例へば、*tabun*、食ぶる、第二活用、〈*tabur*

+u, ocuru、落つる、第三活用、〈ocur+u, miru、見る、第四活用、〈mir+u)。

派生語幹が單一語幹から後者へ其々の既に死滅した、又は、少くとも死滅したと思はれ、其に何等の新意義を傳へないらしい接尾辭を附加して形成されると云ふ事が是と共に顯される。第二活用動詞に於てかく死滅した接尾辭は、形態質 -ur-, -er-, -r- であり、第三活用動詞に於ては -ur-, -ir- であり、第四活用動詞に於ては -r- のみである。

是とは別に派生語幹二類型も說示される。派生語幹大多數は閉語幹プラス-(V+y)-(2) 類型接尾辭から成立するが、小部分は開語幹プラス子音接尾辭 -r- から成立する。此事情は、就中、古代日本語は其展開の或段階に於て子音のも母音のも合流を認容しなかつたと云ふ事に就て證するのである。

第二活用動詞語尾「得る」說、そして形態質合成物 -uru、口語に於ては -eru, -iru 及び -ru に對する傳統的見解、其に從へば -uru は第二及び第三活用動詞現在時限定形語尾であり、-eru 及び -iru は其に對應する同じ活用の同じ時制の口語形語尾であり、-ru は第四活用動詞現在時終結・限定形語尾である、を墨守しさへしなければ、形態分析が至る事實及び或歸結は概して斯かるものである。

此分析は日本語動詞及び其語幹組成を全然別の樣相に於て我々に表示する。其は此說そして形態質合成物 -uru, -eru(第二活)、-iru(第三活)及び -ru(第四活)への傳統的見解の基本缺陷は形式附屬物の過度分解及び其から出て來る日本語動詞組成簡易化から成立すると云ふ事を明示する。單一及び派生

の二語幹（例へば、*tab-*, *tabur-* 又は *tab-*, *taber-*）の代りに「得る」說は單一語幹（例へば、*tab-*）一箇のみを知つてゐるが、何とならば其は派生語幹接尾辭 *-ur-* 又は *-er-* を現在時語尾 *-u* へ附加するからである。此爲に、其は其附加が特殊探究對象たり得そしてたる可き如何なる死滅接尾辭をも知らないのは明瞭である。派生語幹二類型現存は其に對しても認められないで過去るのである。

約言すれば、「得る」說は日本語動詞組成を曖昧に又は簡易にしてゐるのみならず、其を判別し難い迄に曲解してゐる。其は既に獨斷の類に變つたが故に、日本語動詞形態論科學的研究事に於て由々しき障碍である靜寂主義〔kvietizm〕に導くのである。

*　*　*

本來、受身、又は受身・可能相「在得る」說に關しても同上事を言はねばならぬ。該說は受身動詞組成を歪曲するものである。

此說が受身動詞を複合的と誤認してゐるのに、其等は、實際に派生的に見える。其が主動詞と見做してゐるものは、單一又は派生語幹なのである。其が複合二助動詞「在る」、*arn*、及び「得」、*u* と誤認するもの、現在時文語終結形に於ては、卽ち〈*arn*、は受身接尾辭 *-ar-* 及び現在時語尾 *-n* から成立する形態質合成物に見えるのであり、其が同じ助動詞「在る」、*arn* 及び「得る」、

urn, ern と詐稱するもの、現在時文語 限 定 又は口語形に於ては、卽ち〉*arurn, aern*、は或場合には 受 身 接尾辭 *-ar-*、 死 滅 發 端 接尾辭 *-ur-* 及び 現 在 時 語 尾 *-u* に、他の場合には同じ 受 身 接尾辭 *-ar-*、 死 滅 反 復 接尾辭 *-er-* 及び 現 在 時 の同じ語尾 *-u* に分裂する更にもつと複雜な 形 態 質 合 成 物 なのである。

之加、此說が 受 身 相形成に於て 主 要 役割を歸する是等 形 態 質 合 成 物 の部分は丁度一般に 何 等 の役割をも演じてゐないと云ふ事が分るのであつて、何とならば其が動詞「得る」*u, urn, ern* と誤認するものは、或場合には 現 在 時 語 尾 *-u* であり、他の場合には死滅 發 端 接尾辭 *-ur-* 及び 現 在 時語尾 *-u* から又は死滅 反 復 接尾辭 *-er-* 及び 現 在 時の同じ語尾 *-u* から成立する 形 態 質 合成物に見えるからである。

實際は、 受 身 相接尾辭である形態質 *-ar-* に該說が重要な注意を分與しないと云ふ事の爲に、該說は第一活用 古 風 受 身 動詞を認めないのであつて、かくて其等と第二活用 受 身 動詞との間に存する連絡の傍を通過するのである。

「在 得 る」 說觀點からは「受身動詞形成方法が 奇 異 で あ る」(Brown) 又は同じ「受身相が 幾 分 錯 雜 し て ゐ る」(Mac-Govern)と同時に、形態觀點からは何等の奇異も錯雜もないのであるが、何とならば我々は 受 身 相 單 一 接尾辭 *-ar-* 及び 複 合 接尾辭 *-arur-* 又は *-aer-* 以外は、其等の組成が接尾辭 *-ur-* の發端假說及び接尾辭 *-er-* の反復假說によつて滿足に說明される何物をも發見しないからである。

で、終に、「在得る」說は一般に日本語に於ける受身動詞存在を否定するのであつて、何とならば日本語に於ては、實際は、受身相は存すると全然反對を形態分析が明示してゐるのに、Hoffmannは所謂受身動詞は現在能動動詞であると斷言して居り、Chamberlainは劣らず絕對的に受身相は單に假裝せる能動相であると陳べてゐるからである。

＊　＊　＊

更に、「得る」說及び「在得る」說擁護者達は他の動詞頗る多數もの組成を誤つて表示してゐる。

かくて、例へば、彼等は其起源によれば古風受身動詞であるらしくそして合一母音を有する又は有せざる接尾辭 ɛ の助力により全然正格的に形成され、そして同じく正格的に現在時不定形及び口語形に於て此接尾辭を失ふ第二活用自動詞形成に於て存在せざる變格性を認めてゐるのである。

同じく變格的に彼等は第一活用動詞からのみ形成される元來可能相動詞組成をも表示してゐる。彼等が動詞「得る」e, eru 形と誤認してゐるものは或場合には可能意義を獲得した不定形語尾 ɛ に見えるし、他の場合には元々反復意義を有してゐて、そこで複合變化多數の結果として可能意義を獲得した接

尾辭 -er-、及び 現在時語尾 -u の二形態質合成物に見えるのである。

其現在時終結形が對應第一活用動詞の同じ時制の終結・限定形と同一なる第二活用自動詞構造とも矢張好都合に行かない。其等の自動意義は、動詞「得る」eru と誤認されるものが、實際は、古風反復接尾辭 -er- 及び現在時語尾 -u の二形態合成物であるのに、其等の形成に恰も動詞「得る」eru が關與してゐると云ふ事によつて說明されるが、自動意義は文法連結類型によつて限定されるのである。

正に同じく可能機能も亦動詞の自動又は他動意義と同じく文法連結類型によつて限定されると云ふ事が、實際に、分るが故に、受身相動詞可能機能形成も亦誤つて照明されてある。

換言すれば、「得る」說及び「在得る」說は文法連結類型が或場合には眞の動詞語幹形式意義の樣に形式附屬物の形式意義を限定すると云ふ事實を曖昧にしてゐるのである。

* * *

かくて、Hoffmann の言によれば、「言語の哲學的分析の結果」である「得る」竝に「在得る」說は「哲學的」一樣性及び停滯を、實際は、言語學的複雜及び進化が生ずる處へ持込んでゐると云ふ事が我々は解るのである。

併し、日本語文法に對する是等說の疑無き否定的意義にも不拘、是等說自身のでなければ是等に連結せる Hoffmann の或命題の或功績をも注意しない譯に行かない。かくて、例へば、Hoffmann の疑無き功績は、彼が兎も角も受身相接尾辭 -ㄇ- が入る形態質合成物を分離さしてそして其に依つて、成程、全然ではなく、Hoffmann「哲學」說よりも此相の形態構造をもつと歪曲する日本字母音節的特徴の全く結果である土着日本文法受身相形成機械的說から解放され得たと云ふ事に存するのである。

*　*　*

併し、「得る」說及び「在得る」說は一領域、特に日本語比較言語學的研究領域に於ては未だ否定的意義を有してゐる。是等兩說及び凡て其他傳統的見解が此路上の如何なる障碍であるかは、日本語動詞語幹は常に開であると云ふ、受身、又は受身・可能相動詞「在る」及び「得る」の助力によつて形成される等と云ふ類の日本語歐文法の氣儘な誤つた斷言を信用する爲のみに變格對照を爲してゐる H. Winkler〔G. Vinkler〕【ハー・ヴィンクレル】及び W. Pröhle〔V. Prale〕【ヴェー・プロェーレ】の例證に於て解るのである。

かくて、例へば、H. Winkler は書いてゐる。「e に依る受身相形成も其語形變化【Flexion】も亦、斯かるものが出現するアルタイ語に於ける受身相の樣に、同上特徴を顯してゐるが、其處では、かくて、例へば、ラプラント及びヴォグル語に於て受身動詞は此處では e に依てと同樣全然補助要素 n に依て形成され對應的に活用する。全然同上

を我々は形成要素 *u* を有するトゥングース語再歸・受身形に於ても見る。他のアルタイ語受身形成に於ても亦類似現象は共通規則を表示する。例へば、既名トゥングース語 *u* に關して我々は其は「成る」【Werden】と云ふ類似完全語であつたかも知れぬと推察し得るのみであるのに、日本語受身相區別は更に、通常の如く、此處では我々は活動動詞語幹 *e* からの發生を穿鑿するを得ると云ふ事に存する。(3)

動詞「得」*u, e* は受身相接尾辭でないと云ふ事そして後者は接尾辭 *-ar-* の助力により形成されると云ふ事を我々は知る故に、H. Winkler の對照が全基礎を自身下に失つて、日本語領域に於ても、所謂ウラル・アルタイ語領域に於ても、如何なる比較言語學的結論に對しても根據の役を爲し得ないと云ふ事は明確なのである。

W. Pröhle が爲す一對照に關しても同上事を言はなければならない。彼曰く。「日本語 *-ve-*【*v* は露語原著では羅馬字、獨語原著では *w*、以下準之】は、例へば、*mieru, mie-*（古代日本語 *mive-*）「見える」、・・・*kikoeru, kikoe-*（古代日本語 *kikove-*）「聞える」・・・・・*xieru, xie-*［古代日本語 *pive-*（*pive-*【後の *piv* は露語原著羅馬字】）］「冷える」、の様に、中相受身動詞を形成するのであつて、此 *-ve-*【*v* は同前】をモルドヴィン語接尾辭 *-vo-, -vi-*【*v* は同前】及び他のウグロ・フィン語に於ける同じ接尾辭と對照する」。(4)

合一母音を有する又は有せざる形態質 *-j-* は相形成接尾辭であり、形態質 *-e* は所謂不定形語尾である **mije, *kikoje, *xije* ＜ *mie, kikoe, xie* 等形は遡ると云ふ事を我々は知つてゐる故に、此語尾 *-e* とモルドヴィン語再歸及び受身接尾辭 *-vo-, -vi-*【*v* は同前】との同一視は誤謬であるのは明確である。

かくて、日本語歐文法誤謬斷言採用に基く比較言語學的對照は、他の言語族との日本語姻戚關係制定觀點からも、

日本語動詞の形態構造及び進化の正當理解觀點からも、否定的結果を與へてゐるのである。

此故に凡て是等「得る」說及び「在得る」說が凡ての他の傳統的見解と共に出來るだけ速に廢棄される樣に、眞面目に希望せねばならぬのであつて、其は既に遙か以前に爲す可きであつたのである。

註　1　是等動詞に於ては單一語幹は元々閉語幹であつたと考へる根據がある。是等動詞不定形 *ka:u(v)e, u(v)e, u(v)e* に於ては音聲 *e* は《*ya*》行に存する字母記號《(*v*)*e*》によつて傳へられてゐると云ふ事實は、何時か是等形が **ka:uwe, *uwe, *uwe* と發音されたと見做す事を許容する。かくて、其等に於て、閉語幹 **ka:uv-, *uv-, *uv-* を分離さすを得るのであつて此根據の上とは云へ *ka:uu, uu, uu* 形は **ka:uuu, *uuu, *uuu* 形、卽ち閉語幹プラス現在時語尾 *-u* から成立する形へ遡ると云ふ事を認容するを得るのである。特に動詞 *uv*、植う、に對しては、閉語幹 **uv-* は第一活用古風受身動詞 *uar-u*、植わる、に於て、我々は閉語幹 *uv-* を分離させ得ると云ふ事によつて確められる。【以上一二五—六頁】

2　-(母音音聲質＋ν)- と讀む。【以上一二六頁】

3　H. Winkler. Der Uralaltaische Sprachstamm. das Finnische und Japanische, S. 194. Berlin. 1909.

4　W. Pröhle. Studien zur Vergleichung des Japanischen mit den uralischen und altaischen Sprachen. Keleti Szemle【ケレトイ　セムレは洪牙利語『東方評論』の意】。【一名】Revue Orientale pour les études ourralo-altaiques. Tome XVII, p. 161. Budapest【ブドペシト】。1916/7.　【以上一三〇頁】

英文摘要【一三二—八頁】

却つて要領を得難い様に思ふ。《to be-to get》theory 等はあるが露語本文と同じく polygenesis 等の語は矢張見當らない。敢て此處へは轉載しない。終に Translated by *Geo*【*rge*】. *K. Ewing*. とある。

引用文献表【一三九—一四一頁】

1 W. G. A s t o n. A Grammar of the Japanese Spoken Language, fourth edition. Yokohama. 1888.

2 W. G. A s t o n. A Grammar of the Japanese Written Language, third edition. London, Yokohama. 1904.

3 B a l e t. Grammaire Japonais. Langue parlée. 3-ième édition. Yokohama. 1908.

4 Rev. S. R. B r o w n, A. M. Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese, together with an Introduction on the Grammatical Structure of the Language. Shanghai. Presbyterian Mission Press. 1863.

5 B. H. Chamberlain. A Handbook of Colloquial Japanese, fourth edtion, revised. London, Yokohama. 1907.

6 B. H. Chamberlain. A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style). London. 1886.

7 B. H. Chamberlain. 《Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language》. (Published by the Asiatic Society of Japan as a Supplement to Vol. XXIII of its Transactions). Yokohama. Kelly and Walsh. 1895.

8 B. H. Chamberlain. Rodriguez' System of Transliteration. Transactions of the Asiatic Society of Japan, vol. XVI, part I. Yokohama. 1888.

9 M. Courant. Grammaire de la Langue Japonaise parlée. Paris. 1899.

10 Essai de Grammaire Japonaise, composée par M. J. H. Donker Curtius commissaire néerlandais au Japon, enrichi d'éclaircissments et d'additions nombreuses par M. Le Dr. J. Hoffmann, professeur de japonais et de chinois, interprète du Gouvernement des Indes Néerlandaises (Publié en 1857, à Leyde), traduit du hollandais avec nouvelles Notes extraites des grammaires des P. P. Rodriguez et Collado par Léon Pagès. Paris. 1861.

11 J. J. Hoffmann. A Japanese Grammar. Second Edition. Leiden. E. J. Brill. 1876.

12 Dr. R. L a n g e. A Text-Book of Colloquial Japanese. English edition by Christopher Noss. Tokyo. 1903.

13 Dr. R. L a n g e. Lehrbuch der Japanischen Umgangssprache, zweite vermehrte und verbesserte auflage. Formenlehre und die wichtigsten regeln der Syntax. Berlin. 1906.

14 W. M. M c G o v e r n, Ph. D. Colloquial Japanese. London. 1920.

15 K. M e i s s n e r. Lehrbuch der Grammatik der Japanischen Schriftsprache, Deutsche Gesellschaft für Natur- u. Völkerkunde Ostasiens. Tokyo. 1927.

16 H. P l a u t. Japanese Conversation-Grammar with numerous reading lessons and dialogues (Method Gaspey-Otto-Sauer). London-Heidelberg. 1905.

17 P. R o d r i g u e z. Eléments de la Grammaire Japonaise, traduits du Portugais sur le Manuscrit de la Bibliothèque du Roi, et soigneusement collationnés avec la Grammaire publiée par le même auteur à Nagasaki en 1604, par M. C. Landresse. Ouvrage publié par la Société Asiatique. Paris. 1825.

18 A. R o s e-I n n e s. Conversational Japanese for beginners. Part II. Elementary Grammar of the Japanese Spoken Language. New edition. Yokohama. 1919.

19 L. de R o s n y. Eléments de la Grammaire Japonaise (Langue vulgaire). Second édition, revue et corrigée. Paris. 1897.

20 G. B. S a n s o m. An Historical Grammar of Japanese. Oxford at the Clarendon Press. 1928.

21 H. J. Weintz. Hossfeld's Japanese Grammar. Philadelphia. 1914.

22 G. Plaut. Grammatika Japonskogo Razgovornogo Jazyka. Spb. 1910.

23 D. M. Pozdneev. Grammatika japonskogo razgovornogo jazyka. Konspekt lekcij, čitannyx v Voennoj Akademii RKKA i v Institute Vostokovedenija v 1922/23 učebnom godu (litograf. izd.) Moskva. 1923.

24 D. Smirnov. Rukovodstvo k izučeniju japonskogo jazyka. Spb. 1890.

25 E. G. Spal'vin. Kratkij obzor izmenjaemyx častej reči japonskogo kniżnogo jazyka. Posobie k lekcijam po grammatike japonskogo kniżnogo jazyka, čitannym v Vostočnom Institute. Vypusk 1-j (litograf. izd.). Vladivostok. 1913.

26 安田喜代門・國語法概說・東京發行所中興館・昭和三年【以上原著通、以下露文字寫音及露譯省略、以下準之】。

27 吉岡郷甫・文語口語對照語法・東京發行所光風館書店・大正十五年訂正五版發行。

28 湯澤幸吉郎・國語史料としての抄物・國語と國文學・大正十五年六月號。

29 小林好日・新體國語法精說・東京大同館書店・大正拾參年。

30 國語調査委員會編纂・口語法・別記・東京發行所株式會社國定教科書共同販賣所・大正六年。

31 松下大三郎・改撰標準日本文法・東京發行所紀元社・昭和三年再版。

32 三矢重松・高等日本文法・東京發行所明治書院・明治四十三年四版發行。

33 大槻文彦・廣日本文典・東京、明治三十七年第二十六版。

34 福井久藏・日本文法史・東京明治書院・明治四十年、三四版發行。

35 N. N. Durnovo. Grammatičeskij slovar' (grammatičeskie i lingvističeskie terminy). Izdatel'stvo L. D. Frenkel'. Moskva—Petrograd. 1924.

36 A. M. Peškovskij. Russkij sintaksis v naučnom osveščenii, 3-e, soveršenno pererabotannoe, izdanie. Gosudarstvennoe Izdatel'stvo. Moskva—Leningrad. 1928.

37 E. D. Polivanov. Vvedenie v jazykoznanie dlja Vostokovednyx Vuzov. Izdanie Leningradskogo Vostočnogo Instituta imeni A. S. Enukidze. Leningrad. 1928.

38 M. Bréal. Essai de Sémantique, 5-ième éd. Paris. 1921.

39 K. Brugmann. Abrégé de Grammaire Comparée des Langues Indo-Européennes d'après le Précis de Grammaire Comparée de K. Brugmann et B. Delbrück. Paris. 1905.

40 C. N. E. Eliot. A Finnish Grammar. Oxford. 1890.

41 A. Meillet. Linguistique Historique et Linguistique Générale. Paris. 1921.

42 W. Pröhle. Studien zur Vergleichung des Japanischen mit den uralischen und altaischen Sprachen. Keleti Szemle. Revue Orientale pour les études ouralo-altaiques. Tome XVII. Budapest. 1916/7.

43 H. Winkler. Der Uralaltaische Sprachstamm, das Finnische und Japanische. Berlin. 1909.

【山田文法が全然引用されてゐない理由は頗る簡單であつて、卽ち原著者執筆當時手許に無かつたからであると云ふ】

同著者【論文表　一四三—五頁】

1　Materinskaja filiacija v Vostocnoj i Central'noj Azii. Vyp. 1-j. Materinskaja filiacija u kitajcev, korejcev i japoncev. 1910 g. Vyp. 2-j. Materinskaja filiacija u tibetcev, mongolov, mjaoczy, lolo i tai. Izdanie Vostočnogo Instituta. 1911 g. Vladivostok.【東方及び中央亞細亞に於ける母系制。第一號。支那人、朝鮮人及び日本人に於ける母系制。一九一〇年。第二號。西藏人、蒙古人、苗子、猓玀及びタイ人に於ける母系制。東方學院出版。一九一一年。浦鹽斯德】

„Il faut surtout remarquer les travaux de Nicolas Matsokin sur la Filiation uterine chez les peuples de l'Asie

orientale et centrale.... Ce travail est une mine riche d'information de haute valeur sur la filiation uterine chez les Chinois, les Coréens, les Japonais (1 vol.), les Tibétains, les Mongols, les Miao-tseu, les Lolos et les Tai (2 vol.). Nous ne croyons pas qu'on puisse trouver de bibliographie aussi complète de la question autre part que dans l'ouvrage de Matsokin." (*Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient.* Tome XI, No 1-2, page 236. Hanoi. 1911).

„Pour tout ce qui concerne les systèmes de parentée et de filiation, ainsi que l'organisation familiale des populations mongoles et mongoloïdes, cette monographie est bien faite, et l'on ne peut que regretter qu'elle soit d'un usage difficile pour la majorité des ethnographes et des sociologues." (*Arnold Van Gennep. L'état actuel du Problème Totémique*, page 57. Paris. 1920).

2 Iz istorii sem'i na Dal'nem Vostoke (Ambil'-anak u korejcev, kitajcev i japoncev). Izvestija Vostočnogo Instituta, tom 31-yj, vyp. 2-oj. 1916 g. Vladivostok. 【極東に於ける家族史より(朝鮮人、支那人及び日本人に於ける聟取(馬來語 ambil—取、anak—子))。東方學院報告、第三十一卷、第二號、一九一六年。浦鹽斯德。】

3 Mifičeskie《imperatory》Kitaja i totemizm. V sbornike statej professorov i studentov, priuročennom k XVIII godovščine osnovanija Vostočnogo Instituta. 1917. g. Vladivostok. 【支那の神話的「皇帝」とトテム組織。東方學院創立十八年祭用教授學生論文集內。一九一七年。浦鹽斯德。】

4 Sociologija i vostokovedenie v svjazi s istoriej sem'i na Dal'nem Vostoke. Biblioteka《Svobodnoj Rossii》

No 9. Vladivostok. 1921 g. 【極東家族史に關する社會學及び東洋學。『自由露西亞』文庫第九號。浦鹽斯德。一九二一年。】

5 Belye i Žel[t]ye. (K izučeniju novejšej istorii stran Dal'nego Vostoka). Tam že. 【白人と黃人。(極東地方最新史研究〈)。同上。】

6 Japonskij mif ob udalenii bogini solnca Amaterasu v nebesnyj grot i solnečnaja magija. Izvestija Vostočnogo Fakul'teta Gosudarstvennogo Dal'nevostočnogo Universiteta, tom 66-oj, vyp. 3-ij. Vladivostok. 1921. 【天照大神が天岩戸〈雲隱に就ての日本神話と太陽魔法。國立極東大學東洋學部報告、第六十六卷第三號。浦鹽斯德。一九二一年。】

„The author deals with his subject from the point of view of a learned Philologist. He reveals a thorough knowledge of the Japanese language and by going into the roots of the nomenclature of Japanese mythology and the denominations for living creatures and dead nature he makes some very interesting deductions, which throw quite a new light on the origine of different words as well as on rituals and folklore of the Japanese, which are built on this mythology." „Mr. Matsokin's essay will prove of special interest only to the advanced scholar of Japanese the linguist and philologist." (*The New China Review*. February 1922, page 68-69. Shanghai).

7 Skol'ko rabotajut i zarabatyvajut fabrično-zavodskie rabočie ? V žur. 《Vestnik Man'čžurii》 za 1925 g. No 3-4. Xarbin. 【工場勞働者は幾許働いて儲けるか。一九二五年雜誌『滿洲通報』第三—四號。哈爾賓。】

8 Kak živut izgonjaemye iz O:saka obitateli deševyx pansionov ? V žur. 《Vestnik Man'čžurii》 za 1925 g.

№. 8-10. Xarbin.【大阪から追放された安宿居住者達は如何に生活してゐるか。一九二五年雜誌『滿洲通報』第八—一〇號。哈爾賓。】

9 Japoncy o japono-amerikanskoj vojne. V žur.《Vestnik Man'čžurii》za 1925 g. № 5-7. Xarbin.【日米戰爭に就ての日本人。一九二五年雜誌『滿洲通報』第五—七號。哈爾賓。】

10 Japoncy o japono-amerikanskoj suxoputnoj vojne. V žurnale《Vestnik Man'čžurii》za 1925 g. № 8-10. Xarbin.【日米陸戰に就ての日本人。一九二五年雜誌『滿洲通報』第八—一〇號。哈爾賓。】

11 Obzor japonskoj ekonomičeskoj pečati (K. Takaxasi ob ekonomičeskom značenii japonsko-russkogo sotrudničestva). V žur.《Vestnik Man'čžurii》za 1925 g. № 8-10. Xarbin.【日本經濟出版物要覽(日露協力の經濟意義に就て、高橋某)。一九二五年雜誌『滿洲通報』第八—一〇號。哈爾賓。】

12 Obščestvennye dejateli Japonii o russko-japonskom soglašenii. V žur.《Vestnik Man'čžurii》za 1926 g. № 1-2. Xarbin.【日露協定に就ての日本の社會事業家。一九二六雜誌『滿洲通報』第一—二號。哈爾賓。】

13 Iz japonskoj pečati (I. Tacikava o japonskoj politike i ee ekonomičeskix osnovax). V žur.《Vestnik Man'čžurii》za 1926 g. № 3-4. Xarbin.【日本出版物より(日本政治と其經濟基礎に就て、立川某)。一九二六年雜誌『滿洲通報』第三—四號。哈爾賓】

14 Bibliografičeskaja zametka o knige majora S. Sudo:《Japonija v opasnosti i novaja gosudarstvennaja oborona》. V žurnale《Vestnik Man'čžurii》za 1926 g. № 1-2.【須藤某少佐の書物に就ての書籍解題覺書「危機日

本と新國防」。一九二六年雜誌『滿洲通報』第一—二號。】

15　Vyrezki iz japonskix gazet i žurnalov. Posobie dlja studentov japonskogo otdelenija Vostočnogo Fakul'teta DGU. Čast' 1-ja—Tekst. Učebnoe izdatel'stvo DGU. Vladivostok. 1928 g.【日本新聞及び雜誌切拔。極東國立大學東洋學部日本部學生用參考書。第一部—本文。極東國立大學出版所。浦鹽斯德。一九二八年。】

16　Primorskij ris—ključ k razrešeniju prodovol'stvennoj problemy v Japonii. Zapiski Vladivostokskogo Otdelenija Russkogo Geografičeskogo Obščestva, tom 2 (XIX). Vladivostok. 1929 g.【沿海米——日本に於ける食糧問題解決への鍵。露西亞地理學協會浦鹽斯德紀要、第二卷（一九）。浦鹽斯德。一九二九年。】

【1の前半は雜誌『民族』第貳卷第五號（昭和二年七月）の「露國出版日本關係の文献目錄」に、其他も大抵Oskar Nachod. Bibliographie von Japan 1906-1926. Band I & II. 1928 Leipzig に出てゐる】

第十五輯五五頁十一行追加　Semantics: Studies in the Science of Meaning. Tr. by Mrs. Henry Cust. New York 1900. 關係文句無し。

同輯六六頁七行挿入　〔X. Fukui〕名はキウザウ、

第十七輯九一頁十三行追加　【初版1873年】

第十九輯八九頁七行追加　Einleitung in die Sprachwissenschaft. Autorisierte Übersetzung aus dem russischen von Dr. Erich Boehme. 1910 Leipzig und Berlin. S. 119-130.

同輯同頁十六行追加　藤岡勝二博士譯『ヴアンド言語學概論』（昭和十三年十月）一〇五—一三二頁

同輯九〇頁十三行挿入　〔K. Jusava〕姓はユサワ、

同輯九二頁六—八行　獨抄譯は Oskar Nachod. Bibliographie von Japan 1930-1932. Band IV, 1935 Leipzig. S. 279 登錄。

第二十二輯九〇頁九行追加　【大正十五年增訂版一八一頁】

頁	行	誤	正				
		第十五輯		五八	二	yi	yj
七五	五	同じく	其に依つて	五九	一〇	是等	是
		第十九輯		六五	一三	露文字上符ノ	ノ
七一	一	ぴ	び	六九	一三	＼	＼
八〇	一四	役	役割	七九	六	一原著文	一文原著
八五	三	P	p				
八七	一一	r	u				
九三上	七					第二十四輯	
		第二十二輯		一三八	六	朝	期
		抹殺		一三九	四	國	口
		横太線下に在る可きもの		一四〇	三	及び	と
三八	一二—四		t	一四三	一	從	彼
四〇	五		i	一六一	七	Aec	avec
	九	l	su	一六七	一二—五	獨露p	獨S 露str
四九	一三	ru		一六八	一二—四	同前	〔以上〕